

災害ワークキャンプが作ったもの ——住民からみた「唐桑キャンプ」——

山口 健一

要旨

東日本大震災において災害ワークキャンプは、活動対象地の村落社会に何をもたらしたのか。本稿は、それを宮城県気仙沼市唐桑町で実施した唐桑キャンプの事例に着目して考察する。その際、唐桑キャンプと関わりのある住民8名のインタビューを主に扱った。

本事例の災害ワークキャンプは、村落社会の生活形態に適応した活動を行った。それは、村落社会の住民たちの〈つながり〉の網の目の中に、参加者と住民が形成する〈つながり〉を通じて入り込み、情報の収集や村落社会の「協同」を代替する機能を担った。活動を通じて形成される参加者と住民との〈つながり〉は、住民のエンパワメントに効力を発揮し、その〈つながり〉の範囲がワークキャンプの活動範囲を表した。その〈つながり〉により実現した被災時の祭りも、住民のエンパワメントに貢献した。

互いに顔のみえる〈つながり〉を形成する災害ワークキャンプでは、参加者と住民が匿名的な関係を形成する「派遣型ボランティア活動」と異なり、活動を受け入れた住民たちが参加者に返礼を行うことができる。しかしその場合にも、〈返礼のジレンマ〉という困難が住民に伴うことが明らかになった。

キーワード：〈つながり〉、「協同」の代替、被災時の祭り、〈返礼のジレンマ〉

1. はじめに

1.1. 本稿の課題

本稿は、2011年の東日本大震災において災害救援、復旧・復興活動を行った「FIWC唐桑キャンプ」(以下唐桑キャンプと表記)を事例とし、その活動が対象地の宮城県気仙沼市唐桑町に与えた影響について考察する。ただしその影響とは、瓦礫撤去や漁具整理ワーク等により唐桑町に物理的に与えた量的な影響ではなく、唐桑町の住民たちの唐桑キャンプに対する評価にみられる影響を念頭に置いている。

FIWC (Friends International Work Camps) とは、ワークキャンプを実施するNGOであり、関東・東海・関西・広島・九州に各委員会がある。ワークキャンプとは、現地で共同生活(キャンプ)を行いながら、現地の住民たちとともに多種多様な労働(ワーク)に取り組む活動である。これまでFIWCは、ハンセン病

や貧困、福祉、災害等の問題に対し活動を行ってきた(西尾・日下・山口2015:10-11)。

唐桑キャンプについては、山口(2015a, 2015b, 2016)がキャンプ参加者(以下キャンパーと表記)の実践と語りに着目して考察している。それらにおいて調査対象をキャンパーに限定した理由は、被災後十分な時間が経過していない中で被災住民にインタビュー調査を実施することが、被災体験の傷口を開きなおしてしまうという危険性からであった。

活動を担うキャンパーの視点からの分析に加えて、活動を受け入れた住民の視点からの分析を加えることは、唐桑キャンプの特徴を複眼的に描き出すことになるだろう。震災から数年たった後、唐桑キャンプを受け入れ、キャンパーと出会った住民たちは、唐桑キャンプをどのように評価しているのか。本稿はそれを検討することにより、災害ワークキャンプが与える村落社会への影響の一端を考察する。

1.2. 調査対象と方法

1.2.1. 宮城県気仙沼市・唐桑町の概況

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置する、太平洋に面した地域である。2011年の東日本大震災により、気仙沼市の沿岸部は津波に襲われ甚大な被害を受けた。死者1,216人（2017年現在）、行方不明者215人（2017年現在）、住宅被災棟数15,815棟（2014年現在）、震災直後の最大時には105か所の避難所が設置された（2011年12月解消）。現在の気仙沼市の人口は約6万5千人（2017年現在）で、震災前の人口と比べると約9千人減少している。震災前から人口減少が進み、現在の高齢化率は35%を超える（気仙沼市HP）。

唐桑町は、気仙沼市の中で岩手県と隣接する北東端に位置する太平洋に面した中山間地域である（気仙沼市HP；帯谷2000：150）。人口は約6400人（2017年現在、気仙沼市HP）。リアス式海岸が続き、明治、昭和の大津波の被害を受けた。主な産業は漁業であり、住民の約半数が直接的・間接的に漁業に携わる。昔は遠洋漁業が盛んであり、それにより建てられた「唐桑御殿」と呼ばれる家屋群は、唐桑町の景観を形作っている（尾形他2013：22）。

また唐桑町住民によれば、唐桑町には、外部者に心を開きにくいしが団結力が強く、一度親睦を深めると強いつながりができる「欧州独特の閉鎖的な風土」があるという（山口2015a, 2016）。その「風土」の背後には、ある唐桑町住民が述べた次の諸条件が横たわっていると考えられる。

〔唐桑町という〕故郷は人の繋がりで存在できる。そこで家系〔＝家族〕を繋ぐためにも、〔自然の中で〕生き抜かねばなりません。そのための仕事〔＝生業〕なのです（瀬戸山2012：184、□と傍点は筆者）。

1969年に内陸部のトンネルが開通するまで船運が盛んであった唐桑半島は、地理的な独立性が高く、一つの島のような生活世界をなしていた（植田2012：65；宮本2013：213）。それゆえ都市部のような生活はできず、自然環境の中で人びとは自ら

の力で生きなければならなかった。そのため住民は、自然を相手にする漁業を主な生業として家族を維持するとともに、地域の課題は住民間の顔のみえる強いつながりによる協同の営みで対処してきた。ここにみられるのは、「家族」を生業の経営や生活の単位とし、「自然」環境で生き抜くための「勤労」と個々の家族を維持するために地域内の「協同」が求められる、村落社会の生活形態である¹。

さらに「協同」は、内容により大きく2つに分けられる。1つは私的な「協同」である。それは各家族が有する私的な課題（例えば家屋の修繕や掃除）に対する、地域内の諸家族間の共同作業であり、「助けられたらお返しをする」という家族間の自発的な互酬性により遂行される。もう1つは公的な「協同」である。それは地域内の公的な課題（例えば集会所の管理）や一家族で担えない私的な課題（例えば葬式の実施）に対する地域内の諸家族による共同作業であり、地域内の諸家族は半ば義務的に参加することが求められる²。

1.2.2. 調査対象者と分析方法

本稿では、唐桑キャンプやキャンパーと出会った唐桑町住民8名への半構造化インタビューや講演会録³（表1）、フィールドノートなどをデータとして扱う。

インタビューの大まかな質問項目は、「唐桑キャ

表1 唐桑住民インタビュー対象者一覧

表記	年齢	性別	所属・備考	実施日・調査形態
RA	60歳代	男	カエル塾設立者 仮設住宅の自治会代表	2014年9月4日インタビュー 2015年1月13日講演会 2018年9月20日インタビュー
RB	60歳代	男	唐桑キャンプの受け入れ 洗心会理事	2014年9月7日インタビュー
RC	50歳代	男	気仙沼市議会議員	2014年9月5日インタビュー 2018年9月18日インタビュー
RD	50歳代	男	気仙沼市議会議員	2014年9月8日インタビュー 2018年9月18日インタビュー
RE	40歳代	男	中学校教員	2011年12月30日座談会 2014年9月6日インタビュー
RF	50歳代	女	民宿経営	2014年9月8日インタビュー 2018年9月18日インタビュー
RG	30歳代	男	唐桑キャンプ参加者	2011年12月29日電子メール 2014年9月4日インタビュー 2018年9月19日インタビュー
RH	20歳代	男	からくわ丸代表	2016年1月14日講演会 2018年9月20日電子メール

ンプと出会う経緯」「唐桑キャンプの活動に対する評価」「唐桑キャンプとの出会いにより自覚したことや変化したこと」である。それらを震災後から時系列順に伺った。座談会や講演会は上記の質問項目に関連する語りを取り上げた。

収集したデータは、ある程度質問項目に沿ってオープンコード化し、①被災前後、②唐桑キャンプとの出会い、③キャンパーとの交流とその深化という大まかな時系列順に整理するとともに、④ボランティア活動全般への評価、⑤唐桑キャンプへの評価という活動上の特徴の点から分析を行った。また補足的に、災害や気仙沼市・唐桑町についての文献も扱った。分析に際しては、山口(2015a:165-167, 2016:49)が指摘する唐桑キャンプの特徴を踏まえ、キャンパーと住民が形成する〈つながり〉(対面的相互行為における個人間の親密で人称的・人格的な関係)に着目した。データから浮上した重要な概念は〈〉で括弧で表記した。インタビュー対象者に本論文の内容確認を実施した⁴。

以上を踏まえると本稿の課題は、①-③と④-⑤を交差させることにより、唐桑キャンプに対する住民の評価を描くとともに、災害ワークキャンプが被災地に与えた影響を考察することである。次節では、東日本大震災の発生から順に、調査対象者の語りを再構成していく。これはいわば、「唐桑町と唐桑キャンプとの出会い」を、複数の住民の観点から照射することにより、断片的でおぼろげだが一つの意味世界として浮かび上がらせる試みである⁵。その意味で本稿は、キャンパーの観点から描き出した唐桑キャンプの意味世界(山口2015a)と、互いに補完しあうコインの裏表をなしている。

2. 東日本大震災の発生と唐桑キャンプ

2.1. 東日本大震災の発生

2.1.1. 震災の発生

2011年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とする東日本大震災が発生した⁶。

自宅にいたRA氏は、地震が多いため「またか」と思ったが、すごい揺れのため裸足で逃げだした。揺

れが収まった後、RA氏は散乱した部屋を片付けた。防災無線によれば3メートルの津波だから、自宅には来ないだろうと考えていたという。そこに隣から「津波だ」という叫び声が聞こえてきた。RA氏は、すぐ近くの土手に徒歩で上がればよいのにもかかわらず、車を運転した。ルームミラー越しに、土煙を上げて津波が押し寄せてくる。RA氏はすぐにアクセルを踏みこみ、数秒の差で津波をかわした。その日は近くの体育館で夜を過ごした(RA)。

市議会議員のRC氏は、気仙沼市役所で会議中だった。ただならぬ揺れで大津波が来ると思った。「とにかく家に帰らないといけな」と思い、市役所の駐車場から車を出すと、海側から山側に向かう道路が大渋滞になっていた。とっさにハンドルを切り海側に向かうと道路が空いており、海沿いに車を走らせて自宅に向かった。帰宅後すぐに悲鳴が聞こえてきた。RC氏は「立場上、私にできることはなんだろうな」と考え、唐桑町総合支所に向かった(RC)。

市議会議員のRD氏もまた、同じく会議中だったが、自宅に帰らず市役所そばの庁舎に移動した。庁舎の危機管理室に入り、RD氏は他の市議会議員と共に庁舎に避難してくる市民の対応を行い、わずかばかりの情報を入手した。翌日の午後3時、車で唐桑町に向かい、家族の安否を確認すると、総合支所に向かった。

福祉施設に勤めるRB氏は、高台にある自宅に帰っており、津波を知らなかった。あとで気仙沼市街地の事務所の職員が必死の思いで高台のホテルに逃げたことを知った(RB氏)。

RG氏は、仕事が休みだったため、気仙沼市街に住む高校生にソフトテニスを指導していた。テニスコートは山の上の方にあった。津波が来るくらいの揺れだったので、高校生を家に帰らせず、高台にある学校に戻させた。RG氏は高校生に冷静な姿を見せたいと思い、車で唐桑町に向かった。その道の途中で消防団員がおり、ここから「唐桑町の方には行けません」と言われた。そこで別の道を迂回したところ、唐桑町の沿岸部が海に浸かっているのが見えた。RG氏の目の高さに屋根が浮かんでいた。その日は自宅に帰れず、中学校の体育館で一夜を過ごした(RG)。

中学校教員のRE氏は、たまたま自宅にいた（RE）。RF氏は生業である牡蠣養殖工場で働いていたが、すぐに自宅に戻り高台に避難した（RF）。福祉施設に勤めるRH氏は、停電した中で仕事を続けていた。施設の利用者を見捨てて自宅に帰ることはできず、1週間以上施設に滞在し仕事をつづけた（RH）。

2.1.2. ライフラインの遮断と避難生活

気仙沼の市街地と唐桑町を結ぶ3か所の道路は、津波により寸断された（RC, RH）。電気や水道、携帯電話といったライフラインも遮断された（RH, RB, RC）。プロパンガスの家庭はガスを使用することができた（RC）。

総合支所に着いたRC氏は、支所の職員とともにまず食料を集めようとしたが、支所にほとんど備蓄がなかった。そこで自宅から食料を集めたがそれでも足りず、支所近くの被災したスーパーから食料を提供してもらった。水は井戸水のある家族から分けてもらった。RC氏は職員とともに車で指定された避難所を回り、避難所の状況を確認して、それぞれに必要な食料や毛布を配付する作業を行った。2日後に、自衛隊により初めて唐桑町の外から食料の支援が届いた（RC）。

RB氏は、自宅を臨時の避難所とし、60名近くの近隣の住民を1週間受け入れた。各家族の食料を持ち込み、ドラム缶の釜と薪で食事を作った。電気が止まっているため、冷蔵庫にあったマグロなどの豪華な食材も並んだ。総合支所の避難所では食料が菓子と水のみだったため、RB氏の自宅と一緒に避難している女性たちが3日間おにぎりを作り配った。夕方になればペットボトルに湯を入れて簡易の湯たんぽとし、朝になればその水を歯磨きや洗顔に使った（RB）。

RA氏も、親族関係にあるRB氏の家で3日間過ごした（RA）。

ある中学校には、帰宅できない約30名の生徒が残されていた。その生徒たちは、校庭に停められた気仙沼行きの路線バスに乗り、ヒーターで暖をとっていた。教員は外で焚火をして暖をとった。RC氏は「これで急場をしのいでくれ」と乾パンなどを配った。そ

の状態はおおよそ2日間続いた（RC）。

また別の中学校では、帰宅できない生徒を教員の車に乗せて暖をとった。ある小学校では、生徒は近くの避難所に移動し、そこで暖をとった。中学校教員のRE氏は、職場の学校の対応に追われていた（RE）。震災発生の翌日に中学校から自宅に帰ったRG氏は、薪を運んだり、山水を汲みに行ったりした（RG）。

2.1.3 ライフラインの暫定的確保と情報の遮断

2-3日後、総合支所は倒壊の危険があるため、屋外にテントを張りそこを災害対策本部とした。市議会議員のRD氏はその担当となり、自治会長や消防団員、唐桑町駐在の警察官とともに安否情報を収集するとともに、ライフラインの復旧や交渉事にあたった（RD）。

RG氏は、自転車を借りて3日間、唐桑町や気仙沼市街地を回り、親族や会社の同僚の安否確認などの情報収集を行った（RG）。

3-4日後、寸断された道路は、気仙沼市内の土木建築業者により車が通れる程度に仮復旧された。しかし唐桑町内の3か所のガソリンスタンドのうち、2か所が津波の被害を受け使用できなくなった。市議会議員のRC氏は、津波被害を受けたが使用可能な残り1か所のガソリンスタンドから、ガソリンを手動のポンプでくみ上げて提供してもらい、総合支所にある1台の公用車を動かした。ガソリンがないため住民の移動は、ほとんど徒歩であった（RC）。

電話はいつ通話可能になるか分からず、携帯電話のバッテリーがなくなると使用できなくなった。小さな太陽光発電機が避難所に来たとき、多くの携帯電話がタコ足配線で充電されたため、その発電機が故障したこともあった（RC）。

唐桑町内にはダムと浄水場があり、水道はそこから引かれていた。以前水道局に勤めていたRC氏の兄とRC氏が確認したところ、浄水場からの配水管に2か所の破裂が見つかった。そこで唐桑町内の3軒の水道工事業者の協力を得て、1週間後に水道が回復した（RC）。

電話が使えない中、RC氏は1台の公用車に乗り合って市役所に何度も出向き、災害の対応について

協議した。しかしそれは非効率であった。また総合支所の中で政治的判断を下す長役は、当時欠員状態であった。そこで総合支所の最上位の職員が指揮を執り、市議会議員がその対応の責任を取る形で、唐桑町の災害対応が進められた⁷ (RC)。

生存上の緊急事態である震災後の数日が過ぎ、ライフラインの暫定的な確保が進む中で顕在化してきたのは、震災や被災の情報がほとんど入ってこない点であった (RB, RC)。そのため、いつ電気が復旧するか分からない日々が続いた (電気は4月上旬に復旧) (RC)。そうした中住民たちは、被害の程度差を超えた「みんな被災者」(RB)として、あるいは面識がなくても相手の素性を問わずに (RD)、自主的に避難所を開設し「一緒に生活」(RB)を行った。つまりここに発露したのは、RB氏が「みんな……この辺の家族制度を思い出していた」(RB)、RE氏が「地区で何とか出来る土壌……人間関係って強い地域」(RE)と語るように、唐桑町という村落社会の生活形態を活用した、その場にいた全員が助け合う「災害ユートピア」(Solnit 2009=2010)であった。

2.2. 唐桑キャンプとの出会い

2.2.1. 鈴木重雄氏との〈つながり〉による受け入れ

唐桑キャンプは、ハンセン病回復者で唐桑町長選に立候補した鈴木重雄氏との〈つながり〉から生まれた。その〈つながり〉は、1963年のFIWCによるハンセン病回復者の宿泊所である「交流 (むすび)の家」建設運動に鈴木重雄氏が参加したことから始まった。その後、その〈つながり〉は、1973年の唐桑町長選に鈴木重雄氏が立候補した際にFIWCのメンバーが応援に駆けつけたり、2007年の鈴木重雄氏が設立に邁進した知的障がい者福祉施設である「洗心会」の30周年記念式典にFIWCのメンバーが招待されるなど、脈々と続いてきた (山口2015a: 141-142)。

2011年3月20日頃、RB氏は仙台市に住む親族とようやく連絡を取ることができた。そのときRB氏は、安否確認用のウェブサイトにはRB氏の顔写真が載っていることを知る。掲載者はFIWCのメンバーであった。また電話が使えない状況の中、唐桑町の高台のある場所だと20時から15分くらい通話できるという情報

をどこから聞いた。そこでRB氏はその時間帯に高台に向かい、FIWCのメンバーと連絡を取った。そのとき支援のために「何名かまず先遣隊を出します」との提案を受けた (RB)。

3月末に先遣隊は、鈴木重雄氏 (1979年に逝去)の遺志を継ぎ洗心会に勤めるRB氏の自宅を宿泊場所とし、避難所として開放されている「高松園」と「第二高松園」(ともに洗心会の施設)においてワークを行った (山口2015a: 146)。

そのようにした理由は、RG氏によると〈つながり〉を有するがゆえの配慮からであった⁸。鈴木重雄氏が立候補した町長選挙は、唐桑町住民を二分するものであった (僅差で鈴木重雄氏が落選)。その後洗心会が設立され現在に至る中で、そこで生じた軋轢は沈静化していった。しかしRB氏は、今回の震災を機に、その軋轢がFIWCのメンバーに影響を与えないか心配した。「FIWCに来てもらうの、本当にありがたかったですよ……せっかく来てくれる方々にね、何だあんた鈴木重雄さんの関係の人かっていう風なこと言われんの、私、正直恐ろしかったです」(RB)。つまり鈴木重雄氏との〈つながり〉を肯定的に評価する活動場所として、高松園と第二高松園が選ばれた。ただし、RB氏によると結果的にその軋轢の影響はみられなかったという⁹ (RB)。

先遣隊のキャンパーたちは、食料を持参して避難所でのワークに臨んだ。被災者から食料を提供されても固辞した。被災者に賞味期限切れの食料を保管してもらい、それのみを受け取った。RB氏は「なんでそんな [ことまで] やる [のか]」と思ったという (RB)。

ライフラインが復旧するまでの避難生活は、特に夜が寒かった。そのため先遣隊は、瓦礫撤去ワークを実施した際、燃える木材を拾い住民に薪として提供した (RB)。

4月に入り、先遣隊は唐桑キャンプへと名称を変えて活動を続けた (山口2015a: 148)。

RC氏は、初めてキャンパーたちと出会ったとき、「胡散臭い横文字の [団体]、どこの若造なんだか分からない奴ら」という印象を受けた。キャンパーたちは「何でも言ってください、お手伝いしたい」といい、

唐桑総合支所に毎日顔を出した。RC氏は、キャンパーに事情を聞き、鈴木重雄氏と〈つながり〉を有しRB氏のところで活動をしていることを知った。RC氏は鈴木重雄氏と〈つながり〉を有しており、RB氏とも交流があったため、唐桑キャンプを信頼しともにワークを行うことにした（RC）。

当時の唐桑町は、情報が遮断された状況にあった。そのため唐桑総合支所で災害対策をとるRC氏とRD氏は、唐桑町の被災状況の情報収集とその発信を急務としていた。そこで、情報発信のためのチラシを作成し配付することにした。RC氏とRD氏は、死者や行方不明者といった被災状況やライフラインの復旧見込みの情報を語り、キャンパーたちがそれをパソコンで文章にし、A3用紙1枚の両面に印刷し、徒歩で各家族に配付して回った¹⁰（RC）。

当時の住民たちは、自らが住む家や地区の復旧にしか手が回らず、かつ情報が遮断されているため、自らの住む地区のことしか分からなかった。情報の遮断が解消されるまでの間、キャンパーたちは、他の地区でワークを行ったり、他のボランティア団体と情報交換を行うことで、その時々情報を収集し伝達する役割を担った（RB）。

2.2.2. ワークとキャンプを通じた出会い

こうして唐桑町で活動を開始した唐桑キャンプは、ワーク（瓦礫撤去や物資支援などのハード面と祭りなどのソフト面を含む）やキャンプ（現地での共同生活）を通じて、唐桑町住民と〈つながり〉を形成していった（山口2015a：164）。

RB氏の家で3日間過ごした後、RA氏は比較的被害の少ない自宅の離れの家屋の2階に住んでいた。RA氏の自宅の母屋は、2階は被災を免れたが、1階は、天井部分が突き抜け壁や戸もなくなり、いろんな物が散乱していた。RA氏の家屋にあった物は外へ流れ出て、他の家屋にあった物が中へ流れ込んでいた。「自分たちでなす術もなかった」事態の中で、「一人では何もできず」、「いろんな手を借りなきゃならない」状況にRA氏は置かれていた。3月24日、被災した自宅にキャンパーが訪れ、RA氏は「一緒に片づけしましょうか」と声を掛けられる。RA氏の最初の印象は、

「えっ」という驚きだったという。それは「手助けすることよりも、声をかけられたこと」への驚きだった。RB氏と〈つながり〉のあるRA氏は、RB氏のもとにボランティアが入ることは知っていたが、FIWCについての知識は全くなかった。つまりその驚きとは、新奇な人びとから声をかけられたことへの反応ではなく、「自分〔が〕呆然としていては、何も立ちゆかない」ことに「はっと気が付いた」反応であった。それゆえRA氏は、被災の現実を前に「呆然としてた心の中に……〔キャンパーたちが〕一筋の明かりをともしてくれ」と語る。そしてその出会いがRA氏の「復旧の第一歩」となった（RA）。

RA氏の自宅の母屋1階のワークが終わると、母屋に残った戸や畳や食器類を離れの家屋に移し、居住環境を整えるワークが行われた。その後、母屋は「アンパン亭」と呼ばれ、2階がキャンパーやボランティア参加者の宿泊や会議の場所として開放された。離れの家屋は、雨風をあたらぬようにしてより快適な居住スペースとなった（後にそれは「カエル塾」と呼ばれる）。ここから、訪れる数多くのキャンパーたちとRA氏との〈つながり〉が形成されていった（RA）¹¹。

4月に入り唐桑キャンプは、活動の紹介とニーズの募集のために手書きのチラシを配付した。RE氏は自宅に届いたチラシを見て唐桑キャンプを知った。またRE氏と高松園の園長は親族関係にあることから、「地区の中でそういう〔ボランティア〕活動してる子、何人か来ているみたい」という情報も届いていたという。自宅が津波により被災したRE氏は、そのチラシに書かれた連絡先に電話をし、瓦礫撤去の依頼をした。「ちょっとどんな感じか行ってみますねー」と対応の声がし、その後数名の唐桑キャンプに参加する現地の高校生とキャンパーが訪れた。RE氏は最初「何を目的にこの人たちは来てるんだろう」という印象を受けたという。4月末と5月のゴールデンウィークに瓦礫撤去ワークが実施された。それをきっかけにRE氏は、RB氏の自宅に寝泊まりするキャンパーたちと食事をしたり、RE氏の子どもがキャンパーたちと遊ぶなど、〈つながり〉を形成していった（RE）。

瓦礫撤去の作業は二次被害の危険性から控えるよ

うに連絡が来る中、「せめて自分の地区は……川ぐらい片付けよう」とのことで、RG氏の住む地区では、4月に川の清掃が行われた。各住民の家屋の片づけもあることから午前中2-3時間の予定で、RG氏は川に入り大小の物を運び出していると、徐々に参加する住民が増えてきた。その後辺りを見回してみると、ヘルメットを被った作業着の4人のキャンパーがいた。最初RG氏は「どこかのお宅の息子さんとか娘さんが帰ってきて手伝っているのかな」と思ったが、「頑張ってきて」などのメッセージがたくさん書かれた作業着が見えた。そこでRG氏は、休憩時間にその4人に話しかけると、東京や兵庫、宮崎など異なる地域から来ていることが分かった。翌日の清掃にもキャンパーたちは参加していた。清掃終了後、RG氏はその4人に話しかけ、RB氏の自宅に宿泊しながら活動していることを知る。RG氏はRB氏の自宅で仕事をすることがあり、かつRG氏の姉が洗心会の職員であることから、RB氏と〈つながり〉を有していた。その話を4人にすると、「よかったら来てください……話聞かせてもらえませんか」と誘われたため、RG氏は訪れることにした。その後車でその場を離れ、しばらくして川のそばを通ると、その4人はまだ清掃作業を続けていた。その際、RG氏は「ほんとに何なんだろうこの人たち」という印象を受けたという (RG)。

キャンパーの宿泊場所を訪れてみると、離れの家屋の何も無いところに寝袋が敷いてあった。RB氏も加わり、RG氏はキャンパーたちといろいろな話をした。「被災してるんだけど……会話がすごく楽しく」、キャンパーによりRG氏のニックネームも付けられた。そうしてRG氏は4人とともに夜を過ごした。RG氏は、この出会いを「友だちができたものだ」と語る。その後RG氏はキャンパーたちと共にワークに参加するが、5月以降仕事を再開したことから夕方以降のキャンプ (共同生活) に訪れるようになり、多くのキャンパーたちと〈つながり〉を形成していった。RG氏がそうしたの、キャンパー個々に「会ってみたい」という好奇心と、新たに友だちができる喜びと、唐桑キャンプが被災について自分の話を聞いてくれるという「寄り添えるところ」だからであった (RG)。

被災後、避難所で生活していたRF氏は、避難者の

食事の準備が女性の役割であるなどの点で不自由さを抱えていた。そのため津波で被災した自宅の片づけが思うようにできなかった。約2か月間の避難所生活の後、RF氏は家族2人で自宅の瓦礫を撤去し始める。この地区は津波の被害が大きく、瓦礫がいたるところに散乱していた。そのため地区の住民たちは、我先にと瓦礫撤去作業を待ちわびていた。そのとき、唐桑キャンプがRF氏の隣の家の瓦礫撤去ワークを行った。RF氏はそれを見てキャンパーに声をかけた。そうしたの、キャンパーたちが「若いので……お願いしやすい」と、RF氏の「藁にもすがる思い」からだったという。唐桑キャンプの活動の話を知りなかつたので、RF氏は「無料でそういう風な仕事をしてもらえる」驚きと、RF氏の子ども世代の若者たちに対する「頼りに」する感覚を覚えた。RF氏の自宅の瓦礫撤去ワークを行う中で、RF氏はキャンパーたちの「冗談を言いながら……笑い飛ばしながら」という「笑顔を絶やさず……元気」な姿を見た。RF氏はそれを見て「気が楽になったり、あら〔私が〕笑ってる」と気づいたという。キャンパーのそうした態度は、RF氏が自らに対し「辛くないのかなっていう安心感」と「これでいいんだなっていう気持ち」を与えるものであった。また家族2人で瓦礫撤去を進めていたRF氏にとって、それを終えるまでに長い期間がかかる見込みであった。何度かに分けて数日間実施された瓦礫撤去ワークは、RF氏に、瓦礫撤去の大幅な進展による「前向きに頑張れる」気持ちを与えた (RF)。

RF氏は、こうして唐桑キャンプのキャンパーたちと〈つながり〉を形成し、「それからずっと交流」を行っていった。震災後数年たった後も、キャンパーたちが「元気だった?」「遊びに来たよ」と、RF氏のもとに訪れ顔を出す関係となっている (RF)。

2.3. 被災時の祭り

2011年8月に開催された「がんばっつおー唐桑夏祭り」は、キャンパーたちや他のボランティア団体の人びとが加わりつつ、唐桑町住民を中心とする実行委員会形式で進められた (山口2015a: 157-158)。

それまで夏祭りは、唐桑町内の各地区で開催され

ていた¹²。しかし津波などの被害による祭りの開催場所の制限と祭りを担う人材不足という問題があり、その年は祭りの開催が困難であった。そこでキャンパーたちは、最初ある一つの地区を対象に祭りを開催する企画を立てた。その後、他の地区のPTAや子どもたちと企画の話し合いを進めると、他の地区の保護者や子どもたちも賛同していった。そうした賛同の輪が広がり、実行委員会を立ち上げ、唐桑町全体を対象にした夏祭りが開催されることとなった。RD氏は、そうした流れの中で、キャンパーたちと何度か話し合いを行い〈つながり〉を形成していった(RD)

RC氏もまた、その流れの中でキャンパーとの〈つながり〉を深めていった。6月頃から毎日のように、RD氏の家や唐桑キャンプの滞り・宿泊場所に集まり、キャンパーたちと企画を出し合い、準備を進めた(RC)。

この祭りの主旨は、「この唐桑、今もう〔気持ちが〕沈みきってるから、何とかしようじゃねえか」(RC)、「発生直後の最初の夏だから……元気をだしてもらおう」(RD)というものだった。しかし「被災してまだ5か月しか経っていない」(RC)中で祭りを開催するという、時期的に尚早であるとの批判もあった。しかしそれは、気持ちが沈んだ「子どもたちのため」(RD)に進められた。

祭り当日には、多くの出店がならび、ステージには大漁旗が飾られた。地元の太鼓演奏や気仙沼の高校のダンス部による踊り、ジャズ、ダンスといった演目が続き、キャンドルアートの明かりが灯った(山口2015a:158)。鎮魂のモニュメントが設置され、鎮魂の花火が上がった。約5千人の住民が祭りに足を運んだ(RD)。

RG氏は、実行委員会や唐桑キャンプのミーティングに何度か参加して、祭り全体の流れを知った。そこで祭り会場と唐桑町内を往復するシャトルバスの運転手の役を買って出る。RG氏は祭り当日、数多くの来場者をバスで送迎した。会場に着くと「ちょっとだけ見て……盛り上がってるなあ」と思い、またすぐバスを出発させた。RG氏は「見たいのは……正直あったけど、当日の様子は「よくわからない」とい

う。しかしそのワークは、キャンパーや住民を含めた「みんなと一緒にやってる感」があり、「うれしかった」という(RG)。

RF氏は、祭り当日に会場へ足を運んだ。「まだ家がボロボロの中でも、そういう催しに行ってみたく……気持ちになった」という。また祭りに行く際、「おしゃれ〔するのを〕忘れてた」ことを、「物を思い出したみたいに」自覚したという。この自覚は、筆者なりに解釈すれば、被災前の〈日常生活における非日常〉をなす祭りが、被災状況下の〈非日常生活〉においては相対的に〈日常生活〉を表すがゆえに、生じたと考えられるだろう¹³。祭り時のおしゃれな衣装である浴衣も、被災により衣服を失った人に対して提供された。RF氏にとってその祭りは、「しょぼんとしていた中でも」「心がウキウキしてた」ひと時であった(RF)。

出店で働くキャンパーたちには、「笑顔で……いらっしやい」と話しかける「地元の人たち楽しんでもらいたいという一心」が見られた。RF氏は、キャンパーたちが「必要以上に気を遣って元気にしてくれてた」という。また祭りに足を運んだ住民も「お返しの笑顔だったり、〔ありがとうの〕言葉だったりをちゃんと〔キャンパーに〕投げかけてくれた」という。それは、キャンパーたちと住民との「意思の疎通が見えたお祭り」であった(RF)。

先述したように、被災後すぐの夏祭りは「喜べるようなまだ時期じゃなかった」(RF)。しかし一方で、その祭りは「人の気持ちを〔前向きに〕動かす」(RD)ものであった。RD氏によれば、震災から2-3か月は、「被災者目線にまで……気持ちと……身体を落として手を携えて」復旧活動を行う人でなければ、ボランティアとして受け入れられなかった。しかし、そのままでは「どんどん人を受け入れることができなくなる」。そこで気持ちの面で「被災を受けた状況から抜け出す」ために、被災という「マイナスのハンディをプラスに変える」転機が必要であった。その大きなきっかけが「がんばっつおー唐桑夏祭り」であった。RD氏は、そうした変化の後、被災状況を見に来て、自らの住む地域の対策の参考にしたり、特産品を買って帰るといった人びとも受け入れるようになったという(RD)。

つまりこの祭りは、住民たちの気持ちを復旧から復興の局面へと動かす一転換点をなしたと考えられる。

3. 唐桑キャンプの評価

ここまでは住民たちの語りを中心に、震災当初から唐桑キャンプの出会いと〈つながり〉の形成、祭りにおける深化のプロセスをみてきた。ここからは、唐桑キャンプに対する住民たちの評価に着目してその特徴を見ていこう。

3.1. 「ボランティア」と呼ばれるワークキャンプ

唐桑町に、これまで町外のボランティアが参入し活動したことはなかった (RC)。そのためインタビューを受けた住民の中で、以前にボランティアと呼ばれる人びとを実際に目にした人はいなかった。阪神淡路大震災 (1995年) や中越沖地震 (2007年) で災害ボランティア活動に従事した知人がいたので知っていた人 (RD) や、マスコミや新聞などで言葉としては知っていた人 (RD, RE, RG)、ボランティアという「考え方……知識 [が] なかった」(RA) 人もいた。

住民たちが有する「ボランティア」のイメージは、無償で作業をする人ないし活動であった (RB, RC, RF)。唐桑町では「無償で仕事を手伝う言い訳が『ボランティア』……そういう使い方」(RC) がされていたという。

唐桑キャンプは、ワークキャンプという活動形態をとっており、その意味で大人数を現場に派遣するボランティア活動と異なる (山口2016)。しかしインタビューにおいて住民たちは、その実践的相違を考慮せず、唐桑キャンプを「ボランティア」という言葉で表現していた。この点について、RC氏は「未だにわかんなかったりする」と語り、唐桑キャンプと最も〈つながり〉の深いRG氏は「ワークキャンプ……自体がよく分かってなくて、ボランティアじゃないんだけど、『ボランティア』というイメージが強い」と語る。それにもかかわらずキャンパーたちを「津波がかわせてくれた仲」(RE)、震災により親友とな

るという語義の「震友」(RA)、「友だち」(RG)、震災後を共に生きた「同志」(RD, RF) と評することから、住民たちは〈つながり〉の形成を重要視するワークキャンプを「ボランティア」と表現していることが分かる。

住民たちは、唐桑キャンプと唐桑町に入った他のボランティア団体との相違を次のように評価していた。RG氏によれば、唐桑キャンプは「学生」が主体であり「手作業」でワークを行うのに対し、他のボランティア団体では、「大人」の「社会人」が主体であり作業に重機も使用するという。RD氏によれば、他のボランティア団体は、資金力と行動力のある「大人レベルの活動」ができており、「学生」が主体のワークキャンプと比べて「支援のレベルに落差があった」という。しかしながら唐桑キャンプは、「途絶えない、継続的にかかわったところに」(RD) その特長があった。

唐桑キャンプに対して住民たちが第一に評するのは、「ありがたい」、「頭が下がる」、「うれしい」といった感謝の意である (RA, RB, RC, RD, RE, RF)。その一つは、RC氏が「人手不足の時にね……手伝ってもらって」(RC) と語るような、ワークへの感謝である。もう一つは、「心を救われた」(RG)、「心に一筋の明かりを灯した」(RA)、「心のケアをしてもらっている」(RE)、「精神安定剤みたいな感じ」(RF) と評されるような、キャンプ (共同生活) や〈つながり〉を通じた住民たちのエンパワーメント¹⁴への感謝である。

3.2. 若者による活動

住民たちによるこうしたワークやエンパワーメントに対する評価は、唐桑キャンプの特徴の一つである。若者による活動という点に対してもなされていた。例えば、RC氏によると「あの被災の苦しい中にありながらも、[ボランティアの] 若い人たちがいっぱいいてくれて唐桑が明るくなったねえって……それを喜んでた人達もいる」という¹⁵ (RC)。

ワークについては、「本当にこいつら [自分の] 家でもこんな仕事したはずがねえなって思うような若い子たちが……手伝ってもらって」(RC) と語るよう

に、若者でありかつ災害の専門家ではない素人の活動と評されている。また〔災害活動の〕「未経験ゆえに、やっぱり途中で投げ出してしまおうとかが心配される」(RD)のものであった。それゆえ、住民たちから「若い子、学生に何ができるんだろうっていう……目で見られたこと」(RD)もあったという。それに加えキャンパーたちは、ボランティアを受け入れたことのない唐桑町では「よそ者」(RD)として住民からまなざされた。すなわち、唐桑町の住民から素人で「よそ者」の「若者」という評価を受けていた。そうした中キャンパーたちは、〈つながり〉の形成を通じて、途中で投げ出すことなく「一生懸命地域に入り」(RD)込んでいった。

ワークの場面では、知識と技能を蓄積した「大人」のボランティア団体との相違もみられた。RF氏のもとには、生業である牡蠣養殖の復旧に「大人」のボランティア団体が、被災した家屋の復旧に唐桑キャンプが入っていた。RF氏によれば「大人」のボランティア団体は、復旧までのプロセスを鑑みて、資材が再利用できるように、かつ修理が簡便になるように作業を実施したという。一方でワークキャンプは、危険だから被災した部屋の「全部上〔の箇所〕を取って」とRF氏が依頼すると、キャンパーたちが「ぶら下がって、バリバリバリ」と剥がすような「勢いで」作業を実施したという。RF氏にとってキャンパーのそうした作業が「あははっ……笑いの原点」となった。RF氏は、前者の活動に「融通がきいて」「形づけて」くれる「大人」の効率性を、後者の活動に「背中押し」をして「精神的に元気」にさせる若い「学生」によるエンパワーメントをみてとる。

そうした若者による活動は、各種リーダーを中心とした小人数の民主的組織というワークキャンプの形態(山口2015b:183-192, 2016)において、その規律が保たれていた。

近くで唐桑キャンプを見てきたRA氏とRB氏は、総じてワークの場面において、リーダーを中心とした統率と組織的な行動が素晴らしかったという。小さな問題は何度か発生したが、そのたびにリーダーが中心となりワーク後のミーティングで検討して対応をとっていった(RB)。ただしRB氏によれば1度、

ワーク先で住民の方とやや大きな問題になったことがあった¹⁶。それは、被災した家屋の家財整理ワークにおいて、あるキャンパーが財布を拾ったことに対し、住民の方がそれを盗もうとしたと捉えた場合である(後にその誤解は解けた)。

キャンプ(共同生活)についても、リーダーを中心とした形態により、その規律が保たれていた。滞在拠点を提供するRB氏はある出来事を挙げる。キャンパーたちが「疲れた」と言いつつワークから帰ってきた。そこでRB氏は「ご苦労さん」と慰労の会を設けた。するとあるキャンパーが少し陽気になりすぎて、大きな声で騒いだ。そのときリーダーが「お前らどこに来たんだ」と注意し叱った。そうした風紀の管理は、引き継ぎで交代しても、新たなリーダーにより続けられた(RB)。

キャンプを通じて形成される住民と若者キャンパーとの交流は、住民のエンパワーメントを生み出していた(山口2016)。RF氏は、「遊びに来たよ」と復旧途上のRF氏の家に訪れたキャンパーたちに「安心だったりとか、力強さだったりとか」の気持ちを抱いたという。なぜならRF氏にとってキャンパーは自分の子どもと同世代であり、自分の子どもには「被災した状況で暮らしをさせたくない」と思った。しかしそういう状況にもかかわらずよそ者の若いキャンパーたちが訪れたからである。またRF氏が「どうやってこれから生きていこうかっていう〔思いをめぐらす〕中で……〔キャンパーたちに間の〕抜けた話をされると」「気持ちが安定した」という(RF)。

また唐桑キャンプの滞在拠点到頻りに訪れたRG氏にとって、RG氏とほぼ同世代のキャンパーたちとの交流は、「自分のくだらない話を聞いてくれ」たり、時に「精神不安定でキャンパーに当たったり」もする「寄り添える」ものであった。その交流を通じた〈つながり〉は、RG氏の「一生背負っていくことになるだろう」震災の「傷」を多少であれ「癒す」ことに寄与した(RG)。

こうしたエンパワーメントは、RF氏が「自分の気持ちのコントロールをちゃんとしてくれる」(RF)と語るように、被災した住民をケアし「寄り添う」ためになされる、キャンパーたちの「理性的な思考や話

し合い」(山口・日下・西尾2015:207)に基づく自己統制により可能になったと考えられる¹⁷。

3.3. ワークキャンプによる〈互酬性の葛藤〉と〈返礼のジレンマ〉

キャンパーたちによるワークの提供は、被災した住民たちに〈互酬性の葛藤〉とでも呼べる事態を引き起こした。これはインタビューを受けた一部の住民にみられた。RF氏はいう。

赤の他人がこうしてね、汗水流して泥だらけになって、片づけしてもらってというのは、ほんとにね申し訳ない。お小遣い程度払わなくちゃいけないんじゃないかなって、常にその葛藤……でも何も無いしねー、……電気も通ってないし……自分で飲む水もないっていう状態だったから。ただ「いやー申し訳ないな」っていうのと「いや、それでも何とかしてほしい」っていうのとの葛藤ですよ(RF)。

RF氏は自分の子どもであれば「片付けるのを手伝うのは当然」という。しかしキャンパーたちは「赤の他人」であり、その人たちに片づけを手伝ってもらうのは、「申し訳ない」という負い目を生むものであった。ここには先述した、唐桑町という村落社会の生活形態が関わっているだろう。被災による自宅の片づけは私的な課題であり、「家族」を単位として行われる。したがって「家族」のメンバーには、相手からの贈与(～してもらう)と相手への返礼(お返しに～する)という互酬性が生じない¹⁸。一方外部者によるワークは、それから逸脱しているため、報酬などの返礼が求められる。つまり、ワークキャンプを含むボランティア活動は報酬を目的としていないのに加えて、被災状況においては返礼が困難なことから、RF氏に〈返礼をするか否かの「葛藤」〉と返礼をしないことによる負い目が生じたといえる。それに加えてRF氏は、外部者による〈ワークを受け入れるか否かの葛藤〉も有していた。すなわち返礼が困難だがワークが必要な被災状況の中でRF氏は、「葛藤」や負い目を生むワークを受け入れるか、それとも復旧が

遅れるもののそれらを生み出さないためにワークを断るかとの間で「葛藤」を抱えていた。つまり、ワークの受け入れをめぐる住民の〈互酬性の葛藤〉は、被災状況下にワークが必要な中で、ワークを受け入れるか否か、ワークを引き受けた場合に返礼をするか否かという二段階の「葛藤」から構成されていた。

このような「葛藤」は、おそらくワークを受け入れた住民たちに大なり小なり伴ったと考えられる。事実、下記のRC氏の語りに見られるように、復旧が徐々に進み返礼が可能になってくると、住民たちは〈互酬性の葛藤〉を解消するために、ワークの提供を受けたキャンパーたちに対して返礼をしていった。そうした返礼が可能になったのは互いに顔の見える〈つながり〉を形成したからであった(山口2016:46)。しかし、ここには〈返礼のジレンマ〉とでも呼ぶべき事態が生じていた。RC氏はいう。

[ワークを受けた後に]好意で[食事などの返礼を]振る舞う分には……なんつうことはないんだけども。……[例えば]おれたち[市議会議員]はね立場上全然ね、せっかくボランティアで頑張ってきてくれるんだから……当然なことだろうと思うから。……ただ、普通の民家の人たちもね、結構振る舞ってたりしたみたいなんでね。……結構それも負担になるというのも、あるわけなんです(RC)。

市議会議員のRC氏は、唐桑町全体という公的な視点からキャンパーたちに返礼を何度も行った。RC氏にとってそれは「当然なこと」であった。一方で個別にワークを受け入れた住民たちは、自宅や生業の復旧という私的な視点からキャンパーたちに返礼を行うだけでよかった。そして自宅や生業の復旧が進んだこと(=キャンパーからの贈与)に対し、住民たちは、「好意で」キャンパーたちを食事に招待するなどの返礼を行った。しかしそれもワークが長期にわたるか、数多くのキャンパーを受け入れた場合には、返礼の規模や頻度が増大してしまった。そのため、RC氏が「負担」と呼ぶように、返礼が復旧の足かせとなる事態が一部生じていた。これが引き起こ

される背後には、ワークを受け入れる住民は少数だが、キャンパーは入れ替わりなどにより多数となる点も挙げられよう。つまり、キャンパーに対する〈返礼のジレンマ〉とは、復旧に向けたワークを受け入れた住民たちによる〈互酬性の葛藤〉を解消させる返礼行為が、住民自らの復旧に悪影響を与えるという事態であった。

RC氏はこの事態を「可哀そうだ、お互いに……いやこれがボランティアの精神ですって言われればそれまでだけだ」と評する。この〈返礼のジレンマ〉は、「助けに行く」(RC)というキャンパーの自発的な贈与行為に対する住民の「好意の」自発的な返礼行為により生じたものであり、その点で「ボランティアの精神」が生み出した、一つの「可哀そう」な帰結であった。

4. おわりに

4.1. 住民からみた「唐桑キャンプ」

本稿では、住民8名の語りから唐桑町の被災状況と唐桑キャンプの活動や評価をみてきた。ここではそれらをまとめ、おぼろげで断片的だが一つの意味世界を描いてみたい。

震災によりライフラインが遮断された後徐々に仮復旧が進む中、唐桑キャンプ(先遣隊)は、鈴木重雄氏との〈つながり〉を経由して唐桑町に参入した。住民に「ボランティア」を受け入れた経験がないことから、おそらく唐桑町に「ボランティア」の新規参入の基盤はなかったと考えられる。FIWCメンバーと鈴木重雄氏との〈つながり〉は、そうした唐桑町への参入を可能にし、活動場所(高松園や第二高松園)や宿泊拠点(RB氏の自宅)の選定に活用された。

「ボランティア」を受け入れた経験のない住民たちにとって、キャンパーたちの外見(ヘルメットと作業着、FIWCという文字)と活動はなじみのないものであった。そのため住民たちは第一印象として違和感や不信感を抱いたが、一方で緊急時の支援の必要性からワークを受け入れていった。唐桑キャンプに対する住民の信頼は、活動が周知されるまでは鈴木重雄氏やRB氏などの〈つながり〉を通じて、周知さ

れた後はワークを通じたキャンパーと住民との〈つながり〉の形成やキャンプ(共同生活)における交流によって、徐々に得られていった。ここに示されるのは、チラシ配布などを通じた唐桑キャンプの情報の周知ではなく、実際にキャンパーたちと出会いワークや交流を通じて〈つながり〉を形成することにより、初めて住民たちがキャンパーに対する信頼を醸成していった点である。翻れば、情報が周知されても〈つながり〉を有していない住民は、唐桑キャンプを信頼していないため、唐桑キャンプにあまり関心のない状態にあったと考えられよう¹⁹。

こうして唐桑町に定着し活動が続けていった唐桑キャンプに対して、住民たちは総じて感謝の意を表していた。感謝の意は、瓦礫撤去などの物質的なワークのみならず、ワークやキャンプ(共同生活)を通じて形成される〈つながり〉による住民のエンパワーメントに対しても向けられた。住民たちは、唐桑キャンプを他のボランティア団体と同じ「ボランティア」と一括りにするものの、唐桑キャンプによる住民のエンパワーメントを、唐桑町に参入した他のボランティア団体と異なる特徴と評していた。すなわち住民たちにとって、他のボランティア団体は、資金力や専門的知識・技能をもち大人数で作業を行う復旧の効率性を重視する「大人」の活動であるのに対し、唐桑キャンプは、素人で小人数ながらも継続的にかかわり被災住民の落ち込んだ気持ちを前向きにさせる「若者」の活動であった。

以上のことから唐桑キャンプは、住民の観点からいっても「『〈つながり〉による現地の人びとのエンパワーメント』を核とした」(山口2015a:165)活動であったことが分かる。むしろ住民たちが語る感謝の意と他のボランティア団体との相違を鑑みれば、唐桑キャンプが(専門的知識に囚われない)素人で「よそ者」で「若者」の活動だからこそ、住民のエンパワーメントに効力を発揮した、と考えることもできよう。ただしその効力を発揮できたのは単に、その担い手が被災地の現状を打破する点で「若者、バカ者〔=素人〕、よそ者」(真壁2012, □は筆者)だったから、あるいはその活動がワークキャンプという形態だったからではない。それらに加え、各種リーダーを中

心としたキャンプ（共同生活）の風紀管理とワークの統率、民主的で理性的な話し合いにより生み出されるキャンパーたちの被災住民に対する細やかな自己統制により、住民のエンパワーメントへの効力は発揮されたのである。

4.2. 災害ワークキャンプが作ったもの

最後に本事例から示される、村落社会に対する災害ワークキャンプの諸活動の成果や限界を、理論的に何点か指摘して本稿を閉じよう。

本事例における災害ワークキャンプは、「閉鎖的な風土」と住民たちが評する村落社会の生活形態に適応して活動を行ったといえる。

端緒の局面においては、先述したように、ボランティアを受け入れた経験のない村落社会において住民との〈つながり〉を活用することにより、活動を開始することができた。そして、「自然」環境下で生存するために形成される互いに顔のみえる住民同士の〈つながり〉の網の目の中に、キャンパーたちはその活動を通じて少しずつ入り込んでいった。筆者のみるところ、大人数で現地に入り、作業のみを行い、住民たちと交流の機会をほとんどもたず匿名的な関係を形成する「派遣型ボランティア活動」（山口2016）では、唐桑町への新規参入が困難なことが想定される。その意味では、互いに顔のみえる〈つながり〉を重視するワークキャンプの形態だからこそ、震災直後の唐桑町への新規参入が容易であったと考えられる。

連絡手段がほとんど使えず、情報が遮断され、ライフラインも途切れた震災直後の時期において、災害ワークキャンプは、〈つながり〉のある施設や人びとを起点に活動を行った。またそれは、住民たちが唐桑町内の情報を得られなかった中、活動を通じて他の地区の情報を収集し、〈つながり〉のある住民たちに伝える役割を果たした。

被災からの復旧が進む時期において、災害ワークキャンプは、〈つながり〉を形成するワークやキャンプ（共同生活）における〈つながり〉を通じた交流を通じて、キャンパーたちは住民にケア活動を行い、住民のエンパワーメントに効力を発揮した。ここか

ら、〈つながり〉の形成が住民に対する活動の効果を促進し、かつその広がり範囲がワークキャンプの活動範囲を表すことが分かる。

東日本大震災が発生した直後、住民たちは「家族」や「協同」といった村落社会の生活形態を活用しながら、互いに助け合いながら生活を送った。例えばそれは、避難所としての自宅の開放（RB）や、避難所での性別役割分業に基づく炊事（RF）、居住する地区の川の清掃（RG）などに見られる。しかし生存上の緊急事態から生活の復旧の局面に移るにつれて、村落社会の生活形態を活用した「災害ユートピア」は徐々に解体していき、その裏返しで家族ごとの被害の有無や程度差が露呈してきた。村落社会の生活形態において、被災した家屋や生業の復旧は私的な課題となるが、被災範囲が唐桑町全体に及びかつその被害も甚大なため、その課題に「家族」や私的な「協同」で対処できなくなっていた。これは、被災した家屋を前に途方に暮れる状況（RA）や、我先に瓦礫撤去作業を求める状況（RF）からうかがえる。またある被災した住民が「自分は家族や親せきを守ることで精いっぱい、だからボランティアの人が来ているろやってくれるのはありがたい」（2011年9月フィールドノート）と語ったように、住民たちは公的な「協同」を担うことが困難な状況にあった。その意味で言えば災害ワークキャンプは、この村落社会の生活形態の機能不全の中、〈つながり〉を通じて「協同」を代替する活動を行ったのである。

災害ワークキャンプは、住民たちが参加者に返礼を行えず負い目を抱える「派遣型ボランティア活動」（山口2016）の形態と異なり、住民たちの〈互酬性の葛藤〉を解消する道筋を有していた。そして、私的な「協同」におけるキャンパーたちのワークとそれに対する住民の返礼行為は、両者の〈つながり〉の形成と深化に寄与した。しかし本検討の結果、それが住民たちに〈返礼のジレンマ〉を生むことも明らかになった。

住民たちの気持ちや復旧から復興に向かう転換点をなした祭りにおいても、〈つながり〉はその効力を発揮した。住民たちとの〈つながり〉をもとに祭りの企画を進め、その〈つながり〉の拡大により地域全体

の祭りへと展開した。その祭りにおける住民たちのエンパワーメントは、祭りの企画や準備を通じたキャンパーと住民との〈つながり〉の形成と深化によって、また祭り当日の出店におけるキャンパーと来場した住民との交流による〈つながり〉の形成を通じて、生み出された。この被災時の祭りには、RF氏の語りに見られる、住民たちのエンパワーメントに資する以下の機能があったと考えられる。震災後間もない住民は、周囲の生活環境が根こそぎ変化した〈非日常生活〉を送っていた。すなわち、住民の生活における〈日常〉は完全に喪失していた。そのとき祭りは、被災という〈非日常〉に覆われることなく、住民がつかの間の〈日常生活〉を取り戻すことに貢献した。なぜなら、祭りは〈非日常生活〉を送る住民たちにとっても〈非日常〉であるため、〈日常生活における非日常〉をなす祭りへの参加を通じて、住民たちは〈日常生活〉に触れることができたからである²⁰。

【注】

- 1 村落社会という地域生活のあり方については、小林（2017）を参照した。なお小林（2017）は農村社会を念頭に「自然」「勤労」「家族」「協同」をその特質としたが、筆者は唐桑町のような漁村社会や半農半漁の社会においてもそれらが程度の差はあれ当てはまると考える。唐桑町の漁村社会の形態については植田（2012a:74-76, 2012b）も参照。
- 2 公と私については、第三者への影響の有無により定めるJ.デューイの区分（1927=2010）を参照した。また村落社会における共同営為の2類型とその特徴については佐久間（2017）を参照した。この共同営為の2類型は、デューイの公私区分と同様厳密に分けられるものではなく、双方の間にグラデーションを含むものであろう。なお本稿では、佐久間（2017）の用いた「家」と「村」という語ではなく、家族と村落社会（地域）というより一般的な表現を用いる。
- 3 インタビュー対象者については、唐桑キャンプの長期滞在者に依頼を行い、唐桑キャンプと深い交流を行った7名を紹介してもらった。座談会や電子メールは2011年12月のFIWC年末キャンプで実施され紹介されたものである。また2名の講演会録は、広島大学の学生団体によるものを本人の許可を得て使用した。引用時には仮名表記とした。
- 4 「カエル塾」はRA氏による復旧後のキャンパーや外部者の訪問・滞在施設であり、「からくわ丸」は唐桑キャンプ終了後に派生したまちづくり団体である。これらについては別稿を期したい。
- 5 この分析に際してはグラウンデッド・セオリー法を用いた。
- 6 この意味世界は、唐桑キャンプと深い〈つながり〉のある住民に限定され、唐桑キャンプへのコミットメントが浅い住民は含まれていない（RH氏を除く）。その点で本稿は、唐桑町と唐桑キャンプとの密接な接点部分の考察である。
- 7 ここで述べる震災発生時の経験は、インタビュー対象者によっては、語りたくない、思い出したくない、あるいは記憶から消しているものであった。それゆえインタビュー時に対象者にその旨の発言や兆候がみられた場合には、その質問を中止した。
- 8 RC氏によれば、市議会議員はそのような立場にないという。しかし、緊急時に政治的判断を下す者が存在しない以上、制度に従う行政官僚組織はその責任を負うことができない。この場合では民意を代表する政治家が、暫定的にその立場を担ったといえるだろう。
- 9 RB氏は、〈つながり〉の有無や強弱による活動場所の選定ではなく、被災の程度に応じた活動場所の選定の方が好ましいという考えも有していたという。しかし筆者のみるところ、当時は情報が遮断されているため、被災状況に応じた判断は困難である。事実、情報が流通するようになってから唐桑町の他地区にボランティア団体が入っていることをRB氏は知った。
- 10 その理由には、RD氏の語る被災直後の状況があると考えられる。RD氏によればライフラインが途切れた緊急事態では、相手の所属を問うことなく対面した人同士が助け合い、緊急事態を過ぎた後に、相手がボランティアなのか、近隣住民なのか、親族なのかが判明したという。RD氏はその状況を

- 「何とか頑張ろうということでは違和感なく思っていた」という。
- 10 このピラ配付は、唐桑キャンプだけではなく、当時唐桑町に入っていた他のボランティア団体と合同で行われた (RC)。
- 11 アンパン亭では、「唐桑ボランティア団」(山口 2015a : 153)の会議も開催されていた (RA)。
- 12 RC氏が幼少の頃は、現在の唐桑町内で大きく3つの夏祭りが開催されていた。それがその後徐々に複数の祭りに分散していったという (RC)。
- 13 被災時での祝祭活動における日常と非日常の反転については、山口・日下・西尾 (2015 : 206-207)を参照。
- 14 本稿では、エンパワメントを「震災後に生きる力をつけること」という語義で用いる。唐桑キャンプによるエンパワメントについては山口 (2015a)を参照。
- 15 ただし若者によるワークキャンプは、住民全員に好意的な評価を与えたわけではない。唐桑キャンプによるエンパワメントの限界については、山口 (2015b : 186)を参照。
- 16 唐桑キャンプの滞在拠点を提供するRB氏は、キャンパーたちからほとんど全ての活動報告を受けていた。
- 17 唐桑キャンプは「ケア」活動の特徴を有している (山口2015a)。
- 18 ボランティア活動に伴う互酬性とそのパラドックスについては仁平 (2011) を参照。また山口 (2016) は、唐桑キャンプにおけるそのパラドックスの解決方法を考察している。
- 19 例えば、後に唐桑キャンプから派生したまちづくり団体の長役についたRH氏は、2011年当時「唐桑キャンプと接点がないため知らなかった」という (RH)。
- 20 これと同様の機能は、芸能人が被災地に訪れた際の住民たちのエンパワメントにも見られるだろう。なぜなら住民たちにとって、芸能人と対面したり芸を鑑賞することは〈日常生活における非日常〉を指すからだ。

【文献】

- Dewey, J., 1927, *The Public and its Problems*, Henry Holt Company (=植木豊訳, 2010『公衆とその諸問題』ハーベスト社)。
- 気仙沼市役所, <http://www.kesenuma.miyagi.jp/>, (2018年8月20日取得)
- 小林一穂, 2017, 「現代農村と農本主義」『社会学研究』100, 61-82頁。
- 真壁昭夫, 2012, 『若者, バカ者, よそ者』PHP文庫。
- 宮本直規, 2013, 「災害とトボス」『震災学』2, 206-223頁。
- 仁平典弘, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会。
- 西尾雄志・日下渉・山口健一, 2015, 「承認欲望の社会変革」, 西尾雄志・日下渉・山口健一『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会, 1-17頁。
- 帯谷博明, 2000, 「漁業者による植林運動の展開と性格変容」『環境社会学』6, 148-162頁。
- 尾形幸輝・加藤亜里紗・木村麻亜子・平田翔也, 2013, 「伝統行事が培う防災意識」『地域構想学研究教育報告』No.3, 19-33頁。
- 佐久間政広, 2017, 「巻頭言 東北農村における集落の共同営為をめぐる」『社会学研究』100, 1-8頁。
- 瀬戸山玄, 2012, 「唐桑物語 (最終回)」『世界』5, 178-184頁。
- Solnit, R., 2009, *A Paradise Built in Hell*, Viking Adult (=高月園子訳, 2010『災害ユートピア』亜紀書房)。
- 植田今日子, 2012a, 「なぜ被災者が津波常習地へ帰るのか」『環境社会学研究』18, 60-81頁。
- , 2012b, 「なぜ集団移転地は海が見えるところでなければならないのか」『震災学』1, 227-248頁。
- 山口健一・日下渉・西尾雄志, 2015, 「親密圏が誘発する公共性」, 西尾雄志・日下渉・山口健一『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会, 203-235頁。
- 山口健一, 2015a, 「〈つながり〉の現地変革としての

ワークキャンプ」, 西尾雄志・日下渉・山口健
一『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会,
137-168頁.

———, 2015b, 「ワークキャンプにおける〈公共
的な親密圏〉生成」, 西尾雄志・日下渉・山口
健一『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版
会, 169-202頁.

———, 2016, 「社会理論と事例研究の間で「生
の技法を分析する」」『都市経営』No.9, 35-51
頁.

What a Disaster Work Camp Had Made: “Karakuwa camp” from the eyes of residents

Ken'ichi YAMAGUCHI

Abstract

This paper considers what a disaster work camp had made in the Great East Japan earthquake in 2011, focusing on the case of “Karakuwa camp” practiced in Kesennuma city, Miyagi prefecture, using 8 residential interviewees who has committed its camp.

The work camp practiced their activities adapting life formations of the rural society. It took functions to substitute “collaboration” aspects of the rural society and collect information of its society, through the work campers entering into residents’ networks by forming intimate interpersonal ties with its residents. The intimate ties between the work campers and its residents create an effect to empower the residents. A festival realized by the ties also contributed to empowerments of its residents. The extent to the ties signifies where the work camp has practiced.

The disaster work camp forming intimate interpersonal ties has been able to have opportunities that its residents reciprocate to the work campers, in the contrast to “dispatch type volunteer activity” which practitioners and residents make anonymous relationships. However, it has the difficulty so called dilemmas of reciprocation for residents.

Keywords : intimate interpersonal ties, substitution of “collaboration,” a festival in disaster, dilemmas of reciprocation

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1208